

# ヘーゲルとハイデガーにおけるユダヤ人と民族の共生の問題

景山洋平（東京大学）

『黒ノート』の公刊は、ハイデガー哲学と反ユダヤ主義の関係をめぐり、世界的な討論を巻き起こしている。明らかにハイデガーはナチスの生物学的人種主義を拒否する。だが、「計算高さの才能」(GA96 82)や「根こぎ(Entwurzlung)」(GA96 82)といったステレオタイプで差別的なユダヤ人観が、存在史による技術時代の哲学的解釈に接続されてしまう<sup>1</sup>。

このユダヤ人観の貧しさは、ハイデガーが立ち入ってユダヤ文化を研究しなかった事を示す。だが、アーレントが指摘した通り、反ユダヤ主義は、ユダヤ人の現実に無関心なまま、ユダヤ人を憎悪する。それ故、存在史と反ユダヤ主義の関係を考察する際、彼が挙げるステレオタイプの内実を詳細に検討するのと並行して、ハイデガーが、存在史という高度な哲学的課題と前学問的な偏見を結び付け、現実のユダヤ人を等閑視して彼らの歴史的意味を一方的に表象した事実そのものに焦点を当てるべきである。

この事実が存在史にとって内在的な可能性だとした場合、我々は二点を問うべきである。第一に、この可能性は、存在史が語る存在の生起の歴史的場としての「西洋(Abendland)」と、この場を反復して新たな共同性を創設すべき「我々」(GA94 1)としての「民族(Volk)」にいかん波及するだろうか。第二に、そうした危険を克服する可能性が、存在史にはあるだろうか。原理上、これはユダヤ人だけでなく、現代日本でも問題になりうる。だが、西洋哲学史におけるユダヤの表象の重要性を考えれば、まずこれに則して論点を分節化しなければならない。

本発表では、ヘーゲルとハイデガーにおけるユダヤ人の哲学的表象を検討し、自己と世界の存在の根底から語られる共同性とその歴史の場について、これに特有の排除の機制を考察する。ヘーゲルを取り上げるのは、彼が、精神の自己実現という形而上学の一つの完成形態に則して近代社会の成り立ちを解明し、その内にユダヤ人を位置づけた点で、ハイデガーの存在史における反ユダヤ主義を理解するための歴史的地平を与えるからである。具体的には、両哲学者について、(a) 共同体におけるユダヤ人の位置、(b) 共同体の存在論的基礎の水準でのユダヤ人の表象を考察する。ハイデガーについては、この作業により顕在化する存在史のナラティブの問題点を克服する可能性も検討する。

周知の通り、ヘーゲルにとり、「歴史」とは精神の自己実現の過程であり<sup>2</sup>、この過程は、人倫に関しては、西洋の、特に北方のゲルマン国家でその極点にたどり着く<sup>3</sup>。「国家」とは、『法の哲学』によれば、客観的な「憲法」と国民の主観的「心術(Gesinnung)」によって自由を具現する「倫理的理念の現実性」である<sup>4</sup>。そして、ヘーゲルは、「国家」におけるユダヤ人差別に反対し、「国家」の理念の下に彼らを法的に平等に処遇すべき事を主張する<sup>5</sup>。だが、人倫の存在論的基盤である精神との関係については、ヘーゲルの語りはユダヤ人との齟齬を顕在化させ、精神の自己実現から排除された民族としてユダヤ人を表象する。初期の『キリスト教の精神とその運命』では、律法の実定性に固執した非道德的なユダヤ人と、「愛」による「運命」との「和解」を説いたイエスが鮮明に対比される<sup>6</sup>。後年の歴史哲学講義では、やはり精神の具体性と主体の自由の欠如が

<sup>1</sup> Trawny, P. *Heidegger und der Mythos der jüdischen Weltverschwörung*. Klostermann. Frankfurt a. M. 2014. Kap.3

<sup>2</sup> Heidegger, M. „Hegel und die Griechen“. GA9 428f.

<sup>3</sup> Hegel, G.W.F. *Grundlinien der Philosophie des Rechts*. §358

<sup>4</sup> Ebd. §267, §257

<sup>5</sup> Ebd. §270

<sup>6</sup> Hegel, G.W.F. *Frühe Schriften Werke I*. Suhrkamp. Frankfurt a.M. 1986. S.301

指摘される<sup>7</sup>。「国家」の法的処遇と形而上学の根底における民族表象とのこうした乖離は、ユダヤ人に対する形而上学的な線引きを実存の根底に秘めたまま、宗教的差異を無力化した形で、世俗国家への参加を許容するものと理解できる。

これに対し、ハイデガーの存在史は、形而上学による存在忘却の歴史を記述する点で、ヘーゲルと違ってそれ自体の形而上学的根拠を持たず、存在の無根拠さにおいて西洋と民族を語りだす。現実のユダヤ人への『黒ノート』の異常な無感覚さは、存在史のこの性格の負の側面として理解できる。則ち、それ自体の根拠を持たないナラティブは、構造上、実態と関係なくあらゆる集団を形而上学的なもの表象して、「我々」の「民族」から恣意的に排除できる。だが、存在史には諸民族の共生に向けて歴史の語りを紡ぐ可能性もある。なぜなら、存在史が現前(*Anwesen*)と非現前(*Abwesen*)の両義性から語られる限り、根本的には、その歴史の「我々」は「記号(*Zeichen*)」的に(GA7 135)、則ち、自己の存在を超えて語りを紡ぐ事で初めて生起するからである。存在の無根拠に立ち臨む人間存在はおのれの有限性を言葉に託す事で初めて反復される。その限り、技術時代の存在史が語る「西洋」は、技術による絶滅の恐怖と苦痛の記憶を語る人々なしには成立せず、彼らに場所を与えねばならない。それ故、ショーアー以後、ユダヤ人がこの「西洋」の不可欠な一部である事は明白である。

---

<sup>7</sup> Hegel, G.W.F. *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte Werke 12*. Suhrkamp. Frankfurt a.M. 1986. S.243